

# 初期出版界と古浄瑠璃

柏 崎 順 子

これまで江戸初期ある限られた時期に存在した、いわゆる江戸版の考察を出発点として、当時の出版界の様相について考察を重ねてきた。

江戸版とは万治・寛文期に江戸で出版された独特の造本様式を有する本のことである。江戸版のテキストは、それ以前に京都で既出版されているテキストを利用したものであるが、その元版である京版とは異なる独特の造本様式で仕立て直したものである。この江戸版を出版する江戸の書肆には、松会という書肆が筆頭にあげられる。営業の動向や江戸版の出版点数などからいって、江戸版出版の中心的存在といってよい書肆である。そこで、松会版の悉皆調査を目標に調査を重ね、『増補松会版書目』としてまとめ<sup>(1)</sup>、この資料をもとに書肆松会の動向を考察したところ、その営業方針において、四期に分けられることが判明した。即ち明暦以前、万治・寛文期、延宝・天和期、貞享以降の四期である。明暦以前は刊記に「松会市郎兵衛」と記載することが多く、そのほとんどが京版の覆刻か求板を行っており、主に漢籍や仏書、実用書の類を出版している。万治・寛文期になると、いわゆる江戸版の出版を開始する。江戸版はそのほとんどが仮名草子で、明暦以前とは出版する内容が一変することになる。そして、この時期にはその他の江戸版を出版する書肆、山本九左衛門・本問屋も営業を開始している。松会を含むこれら三書肆が出版する江戸版は、京都に元版が存在するものがほとんどであるが、その元版をそのまま覆刻するようなことはせず、必ず独特の造本様式に作り替えて出版すること、一度江戸版になってしまっているものは、更に他の江戸版を出版する書肆が覆刻するケースもあるが、作り替えるケースも存するという法則性があり、いずれにせよ京版を元版とするテキストを江戸版を出版する三書肆が共有する傾向があることが判明している。この法則性の存在から江戸版は元板に許可なく作成されているのではなく、江戸と上方の書肆間に何らかの繋がりが存し、その結果作成された本と考えられるのである。ということは、これら江戸版を出版する書肆は個別に京都の元版を利用していたのではなく、一つのグループとして京都の書肆と繋がっていたとい

えよう。次期の延宝・天和期は江戸版が激減し、その替りに明暦以前のように京版の求版や覆刻が主な出版物になる。内容も実用書や往来物、新しいところでは謡曲の本などに变化する。この時期には前期の江戸版を出版していた他の書肆、本問屋や山本九左衛門とのグループ関係はおそらく解消されており、本問屋や山本もそれぞれ浄瑠璃本の出版に乗り出したり、師宣絵本を出版したりと、各自江戸版以外の出版を模索している様子うかがえる。貞享以降は、貞享三年刊『兼好伝記』あたりを皮切りに刊記に松会三四郎の名が現れはじめ、おそらくはこの期に代変わりのあったらしいことを思わせる。延宝・天和期には僅かに行われていた江戸版の出版は無くなり、その代わりに上方書肆との相版が増加する。松会は『武鑑』の出版を開始したり、江戸でのテキストの開発に努め、江戸の作者や序文を物する人間を模索、獲得している様子うかがえるのである。また御書物師となって幕府との関係を有するようになり、新たな展開をみせている。

このような書肆松会の動向は、そのまま初期江戸の出版界の動向に連動しており、京都と江戸の出版界の様相を考察する資と成り得るものであった。江戸版を出版する書肆同士の関係や、元板である京都の書肆との関係等が明らかになり、その後、さらに書肆松会の御子孫の可能性が高い松会氏が伊勢出身であることが判明し、そこから伊勢と出版界との関係性を検討してみた結果、江戸初期出版界の考察には京都と江戸に加え、そこに伊勢をも含めて構造化してみる必要性が生じたのである。

そしてそのような範囲で考察するにあたり、その射程とするジャンルの範囲も、当初江戸版が主に仮名草子を対象として作成されていたところから、仮名草子というジャンルの問題として考察していた段階から、より大枠の、当時娯楽に供する目的で新たに登場してきた他のジャンル、古浄瑠璃や幸若舞曲、お伽草子や奈良絵本といったジャンルにまで拡大して考察するべき段階に入っている。本稿ではそのうちの古浄瑠璃について考察するものである。

この古浄瑠璃の考察にあたっては、母利司朗氏による「近世前期江戸版の本文版下」<sup>(2)</sup>という最近の論文について紹介しておきたい。筆者は以前、江戸版を作成する書肆のうちの山本九左衛門の出版する江戸版に山本九左衛門様式とでもいっていいような独特の字風が存すること、その字風がおそらくは江戸の山本九左衛門の縁戚関係にあるであろう京都の草紙屋山本九兵衛の出版する版本の字風と通底するものがあるという事実を指摘したことがある。これに対して母利氏は、こうした書風は上方では山本九兵衛版だけにとどまるものではなく、京都の草紙屋の鶴屋喜右衛門や八文字屋八左衛門等が出版する正本も同様の書風を有していたことを指摘され

ている。そして「一文字あたりに与えられた狭いスペースにいかに字を押し込むかを重視した書風である。」とし、「これがさらに詰め込まれ、デフォルメされたのが、いわゆる「しらみ本」や「丸本」の書風であった。」と言及されておられる。この点に関しては筆者も全く同様に考えている。京都の山本九兵衛や鶴屋喜右衛門、八文字屋八左衛門らの出版する古浄瑠璃、しらみ本や丸本という順番で、すなわち後年になるほど圧縮の度合いが高まるのである。要するに筆者が山本九左衛門様式と称したのは、仮名草子の範囲においての呼称である。仮名草子においては山本九左衛門以外の江戸版とは差別化できる書風であるということを述べたかったのであるが、それはさておき、拙稿において山本九左衛門と山本九兵衛の書風の類似に言及しておいたのは、以下のような問題意識があったからである。

書風の点においては山本九左衛門の書風が本家筋と考えられる京都の山本九兵衛を含むところの浄瑠璃本一般の書風に繋がっているのであれば、言い換えれば造本上の書風という問題において九兵衛と九左衛門に関係があるとすれば、何故山本九左衛門は、テキストに関してもその調達に難しい江戸で営業するにあたり、直接本家筋の山本九兵衛が出版していたテキストを利用して、あるいはより直接的に山本九兵衛の出版する浄瑠璃そのものを出版するということをせず、わざわざ書肆松会を中心とする主に仮名草子である江戸版を出版するグループのなかで、テキストの調達をするという面倒なことをしていたのかという疑問が残るのである。万治・寛文期といえば、升屋や吉田屋、伊勢屋などといった書肆が江戸で浄瑠璃本を出版していて、浄瑠璃界の出版の動向としても、九左衛門が江戸で浄瑠璃本を出版しても何ら不思議ではない状況にあったのである。にもかかわらず、九左衛門が万治・寛文期に出版した古浄瑠璃は管見にはいない。九左衛門に関しては書風に関する他ジャンルや他地域との関係性という問題のほかに、テキスト調達の点においても疑問が残るのである。こうした状況をどのように考えればよいのか。さらに江戸版の特徴が江戸版特有のものとは言い難い問題は実は挿絵に関してもいえる。江戸版の挿絵の特徴であるいわゆる「師宣風」の挿絵が、前稿までにも指摘したようにしばしば万治・寛文期以降の上方版の仮名草子の挿絵にも散見されるのである。また浄瑠璃本の挿絵についても師宣風といってよいものが上方にも江戸にも散見される。つまり、江戸版の特徴のうち、書風と挿絵は京都の出版界にも存する要素であるということになる。このような問題を考える上でも初期出版界の様相の解明にはジャンルを拡張しての考察や、伊勢との関係という新たな視点を加えてみるのが有効であると考えられるのである。

以下にこれまで考察を重ねてきた結果判明している初期出版界の状況、即ち江戸版を出版する中心的存在である書肆松会の営業の動向が四期に分けられること、その特徴と江戸版を出版する他の書肆の営業の様相も連動していること、江戸版を出版する書肆とその元板を出版する京都の本屋との間に何らかの関係性を指摘できること、そうした江戸と京都の出版界の関係性は、そこに伊勢を加えた枠組みで考察する必要性の存することを念頭において、古浄瑠璃界の様相について考察してみたい。

### 古浄瑠璃の展開

浄瑠璃は本来、語りものとして出発したものである。実際、当時の公家の日記等に万治・寛文期に盛んに個人の邸宅等に太夫が呼ばれ、浄瑠璃を語っている記録を確認することができるのは周知の事実である。そこから当時出版された古浄瑠璃の正本は、基本的にはまずそうした太夫が語った内容をもとに作成されたと考えるのが自然といえよう。しかし実態は異なるようである。この問題に関しては阪口弘之氏が、古浄瑠璃の展開についての一連の考察において多くの示唆に富んだ実態を報告されている<sup>(3)</sup>。そこで阪口論文について古浄瑠璃の展開をその本文に着目して整理してみると、

- 語り物の時代 街道筋で浄瑠璃が語られていた時期
- 慶長・元和期 操り浄瑠璃成立の時期
- 寛永期（正保・慶安） 正本の刊行が開始される時期
- 承応・明暦・万治・寛文期 創作の時代－作者の登場
- 延宝・天和期 宇治嘉太夫の登場
- 貞享以降 竹本義太夫の登場により古浄瑠璃の世界からの脱皮

というように分類できるとする。阪口氏は諸作品の本文の誤読の継承のされ方等の詳細な本文批判から、それぞれの時期においてそれ以前の本文とは断絶があることを検証されている。このうち、語り物の時代と慶長・元和期については、出版の様相を考察する本稿では検討の対象外となる。ただ慶長・元和期については、具体的な演目として「五部の本節（安口の判官）」「弓継」「鎧替」「戸井田」「五輪砕き」「しだ」「鎌田」「午王の姫」「阿弥陀の胸割」「山中常磐」等が確認されており、これらの演目のほとんどは浄瑠璃以外に説経や舞曲としても語られてきたもので、

「詞藻に限ればジャンル間の差は余りない」(阪口氏) ことを確認しておきたい。慶長期はまた操り浄瑠璃が登場した時期でもある。

### 〈寛永期〉

寛永期には正本の出版が開始する。浄瑠璃史のなかで浄瑠璃が出版と関わりを持つのはこの寛永期以降ということになる。そしてこの期に出版されるようになった浄瑠璃の正本は、この期に登場した浄瑠璃の正本を専門に出版する浄瑠璃本屋によって出版されている。この期の浄瑠璃正本の本文について阪口氏は、寛永から正保にかけて舞曲から本文移入をみた浄瑠璃が散見され、それらはいずれも大頭系の舞の本文、またはそれを承けた寛永頃絵入り整版本に依拠していることを指摘している。つまりこれら寛永期の浄瑠璃正本の本文は耳から取り入れた口承ではなく、明らかに書承によって成立したものであるというのである。語りがそのまま文章化されたのではなく、「舞の本を座右に置いて、それを「てにをは」に至るまで殆ど忠実に臨模して成」っているとし、浄瑠璃の正本が浄瑠璃以外の記載文献からの書承本文をもって上梓されていることから、この画期が出版書肆によってもたらされたものであるとされている。浄瑠璃が出版と関わりをもつ時期がこの時期からであり、その時点から本文が書承に依拠するという転換を見せるのであるから、そこに出版書肆の関与をみるのは自然なことであろう。そして『色道大鏡』の記述を引用し、その内容について、「旧来とは些か趣を異にする当代的な作品に変貌を遂げてきたというのである。寛永期は、そうした意味で、浄瑠璃が語り物的要素を削ぎ落としながら、しかしその一方で、その特性をいかに演劇様式の中に生かすかを懸命に模索した時期であった。」とされている。またこの寛永期に出版された正本の形体は、秋本鈴史氏によれば、その形式が寛永二年からわずか十年ほどで横型本から縦型本へ、十二行本から十三行本、十四行本へと変化する<sup>(4)</sup>。以後慶安末までの十八年間、浄瑠璃本の行数は十四行に固定するが、なお寛永末年までは冒頭や巻末の様式では試行錯誤が続き、それも寛永二十年正月刊の『いけとり夜うち』あたりから固定化し、上下巻冒頭に「天下一若狭守藤原吉次」などと太夫の名が入り、巻末に刊年と版元を記載する形式になる。そして鈴本氏は著名な浄瑠璃本屋が寛永期に相次いで専門書肆として登場したことに注目され、「本屋と浄瑠璃芝居とのこのような提携関係は、浄瑠璃本の形式が急速に変わっていくこととも密接に関係していた可能性がある。浄瑠璃本が行数を増加させていく過程をもう一度見直すと、本屋と芝居の提携関係が強化される過程に重なっていることに気付く。十三行本になる頃に「浄

瑠璃屋」という専門書肆が登場し、十四行本時代になると誰の正本であるかという芝居側の情報が大きく記載されるようになってくるのである。(中略) 浄瑠璃本の専門書肆になった時点で、その商売は浄瑠璃芝居の人気ともとより密接に関係することになった。本屋は作品作りに関与し、浄瑠璃は舞台上でそれを上演する。人気作であれば、芝居も儲かり、本もまた売れたのである。」と述べられている。京都における浄瑠璃本屋の登場と、浄瑠璃がその書肆と提携して大きく転換した事実は重要である。こうしてみると初期京都の出版界において新たに登場してきた浄瑠璃本を出版する書肆は、営業を開始してみたところ、ちょうどその期に浄瑠璃という恰好の出版材料を獲得できたというよりは、あらかじめ浄瑠璃を商品化する目算があって登場してくるという位置付けが正確なところであろう。浄瑠璃の正本を専門に出版する「浄瑠璃本屋」として営業を開始しているのであるから、本来は語り物である浄瑠璃を本文化できる体制、即ち興行界との繋がりが成立しているからこそ営業を開始できるわけである。つまりこうした新興の書肆が営業を開始する時点で、浄瑠璃との関係はあらかじめ約束されていたと考えられるのである。浄瑠璃界と書肆というように別枠で考えるのではなく、両者一体で企画された商業ビジネスととらえるべきではないかということである。

こうした当時の書肆の在り方については、浜田啓介氏の「草紙屋仮説」という論文<sup>(5)</sup>が真正面から取り上げた嚆矢であろう。浜田氏は、極く早い時期の成立である仮名草子『恨の介』は、京都の公家のような知識人ではなく、絵草紙屋自体によって著された作品ではないかとの説を提示された。絵草紙屋には既成の草子類のテキスト・挿絵等、商品の集積があり、あわせて草子作りのノウハウの集積もあったに違いないとされ、「こうした本の製本・彩描とともに恐らく文筆成文の技能をも職業的知識としてもっていたのであろう」と述べておられる。この説は仮名草子やお伽草子、奈良絵本それぞれの研究において、各ジャンル相互の挿絵の転用や、出版者の本文作成の可能性が先学によって指摘されていること等を紹介されていることで、より説得力を増している。また秋本鈴史氏は「浄瑠璃本を出版した本屋はこの「草子屋」を自称していた。『ともなか』ほか多くの浄瑠璃本を出版した草子屋九兵衛をはじめ喜右衛門・太郎右衛門・太郎左衛門・長兵衛など、当時に浄瑠璃本を刊行した多くの本屋が「草子屋」を名乗った」ことを指摘されている。

ということは、浄瑠璃本を出版する書肆は、本文が集積していくセンターのような機能を有しており、他のジャンルの本文の作成にも関与していたと考えられる。さらにその書肆は浄瑠璃の興行界とも何らかの繋がりをもって営業を展開している

形跡があり、単なる書肆としての営業というよりは、一種の芸能プロダクションのような機能をもっていたと考えられるのである。

ところで浄瑠璃界の考察には太夫の存在が重要な位置を占めることはいうまでもあるまい。この寛永期には太夫在名正本も登場し、人気も実力もある太夫が登場してくる。その代表的太夫のひとりが伊勢鳴宮内である。宮内は『閑際随筆』に、「間の山両町芝居之事 寛永十二年浄瑠璃芝居 太夫本／勸進本 伊勢鳴宮内」とあり、寛永十二年には伊勢間の山で勸進本をしていたことが知られていたが、この記載だけでは伊勢で興行したことが証明されるだけで、伊勢の人間と断定することはできなかった。しかし阪口氏によって、吉田城主水野忠清に仕えた大野治右衛門定寛の日記「定寛日記」の寛永十八年に、「伊勢を参宮内太夫、上留りかたる」という記載の存することが紹介され、伊勢出身であることが確実となった<sup>(6)</sup>。この宮内はその後江戸に行き、そこから京都に上ったらしい。『東海道名所記』に「ちかきころに、江戸より、宮内といふもの上りて、左内とせり合、いろいろ、めずらしき操をいたしける。」とあることに拠る。また『隔冥記』には寛永二十一年正月に四条河原で宮内が興行している記録があり、宮内の上洛は同時期の山城左内とともに京都の浄瑠璃界に活況をもたらしたという。宮内の正本は報告の限りではすべて京都で出版されているが、その正本に「江戸伊勢鳴宮内」と明記していることから、江戸から京都へ入ったと考えられる。ただし宮内が江戸で浄瑠璃を語ったという記録はなく、江戸出版の正本も存在しない。伊勢で太夫本と勸進本を兼ねていたことを考えれば、太夫としてというよりは、何か興行に関する方面に従事していた可能性も考えられるのではなからうか。ちなみに阪口氏が紹介された『定寛日記』の寛永十八年八月二十一日の条に「上留りかたり伊勢を参、いのちこい、ほり江二なかれ有り」と、また八月二十四日の条に「右之伊勢上留り語り出来坊まハス、夜うち曾我・十番切まで御座候」という記載がある。この伊勢からの浄瑠璃語り宮内とは別の浄瑠璃語りであるとすれば、阪口氏も指摘なさっているように、伊勢には多くの語り手がいたことになる。こうした語り手とともに江戸に入り、興行に携わっていた可能性も考えられよう。いずれにせよ、伊勢鳴宮内はその活動範囲として浄瑠璃界において江戸と京都と伊勢を繋ぐ存在といえる。江戸版の考察の過程で、初期出版界について江戸・京都・伊勢という三地点を構造化して考察するべきであると考えられる。拙論に重なっていく事象ということになる。また宮内の正本は判明している分に関しては、すべて山本九兵衛が出版している。この宮内と書肆との関係については秋本氏が、「宮内が上京した寛永二十年頃が、本屋と芝居との提携関係も

ほぼ安定し、正本の形式も固まってくる時期に相当することは注目される」とし、「宮内が上京後に残した四つの正本には本屋が関与した痕跡が残り、正保慶安期の浄瑠璃の特徴をよく備えている。『石山七騎落』（正保四年六月刊）が『源平盛衰記』、謡曲『七騎落』、舞曲『切兼曾我』『十番斬』などを用いて再構成した作であることは、すでに詳細に論じられている（原道生「二つの『石橋山しちきおち』」、『明治大学文学部紀要』六四、1990年）。『たむら』（慶安三年八月刊）もお伽草子の『田村の草子』を借りながら、親子二代の物語を謡曲『田村』の構想を用いて再構成したものであった（秋本鈴史「たむら」、『赤木文庫古浄瑠璃稀本集』、八木書店、1995年）。『ふきあげひてひら入』（慶安四年九月刊）は古い語りものである『浄瑠璃姫物語』を題材とするが、諸本にほとんど含まれない「秀衡入」を含む点にかえて本屋の関与がうかがえる。」（「寛永期の浄瑠璃」）とされているのであるが、この宮内の正本の作成に関与した本屋というのが山本九兵衛なのである。既述のように、当時の諸ジャンルの作品が絵草子屋（浄瑠璃本屋）という、センターのような機能を有している場で作成されていたこと具体例をここでも確認することができ、そのような機能を持ち、かつ工房のようなものを有していた草子屋のひとつが山本九兵衛だったと考えられるのである。そしてそうしたセンターのような場で、江戸から上洛した太夫である伊勢嶋宮内の正本が作成されていることは注目される。京都の娯楽的文芸を広く制作している場が、江戸との関係を有していることを示唆する事象といえよう。この山本九兵衛は次期の万治・寛文期においても江戸の浄瑠璃界と繋がっている節があるが、寛永期にすでに江戸浄瑠璃との関係が生じているらしいことは留意すべき点であろう。

#### 〈万治・寛文期〉

この期は浄瑠璃界に作者が登場し、浄瑠璃が創作の時代に入り、そのことによって本文が大きく転換した時期である。具体的には坂田金平という主人公を擁した金平浄瑠璃の登場によって、作劇法が大きな躍進を遂げ、東西の浄瑠璃界が活況を呈した。浄瑠璃界にこの変革をもたらしたのが、江戸の和泉太夫と浄瑠璃作者岡清兵衛コンビの登場にあった。現在確認できる岡清兵衛在名正本十一本のうち、大夫名の記載のない一本を除き十本は和泉太夫（含受領後の丹波少掾）の正本で、その太夫名の記載のない正本も和泉太夫の正本である可能性が高いという。この金平浄瑠璃は、ほどなく受領して丹波少掾となった和泉太夫や虎屋喜太夫の上洛と前後して上方の浄瑠璃界に移入されることになる。京都で次々と江戸系の浄瑠璃の正本が刊



行されているのである。このような京都の正本の出版について、阪口氏は和泉太夫の寛文二年八月の受領に先立つ六月からの京都での江戸系金平物の浄瑠璃本出版として、

|    |               |         |         |
|----|---------------|---------|---------|
| 六月 | あさいなしまわたり     | 伊藤出羽掾正本 | 山本九兵衛板  |
| 七月 | くわばら女之助兄弟かたき打 |         | 山本九兵衛板  |
|    | 金平最后          | 和泉太夫正本  | 山本九兵衛板  |
|    | 金平関破り         |         | 山本九兵衛板  |
|    | 四天王高名物語       | 和泉太夫口伝  | 鶴屋喜右衛門板 |
|    | いし山もんだう       | 大和少掾正本か | 西沢太兵衛板  |
| 八月 | 常陸坊かいぞん       | 伊藤出羽掾正本 | 山本九兵衛板  |

を挙げられ<sup>(7)</sup>、こうした京出来の金平系正本は、和泉太夫や虎屋喜太夫が上洛後にその語りを土台にして成った正本ではなく、江戸で出版された正本を膨らませたり、省略・改変したりして成っていることを、本文の比較によって検証されておられる。そして「上方に移入された江戸浄瑠璃を本文レベルからみる時、そこに江戸正本がテキストとして介在し、その正本と書承的に繋がっている事実も注目されねばならない。決して口頭的に受け入れられた詞文ではないということである。」とし、「このような省略法が芝居の語りの現場から生まれたとはいささか考えにくく、こうした本文改変が書肆サイドで行われている」ことを指摘しておられる。引用が長くなるが、最後に阪口氏は次のように結んでおられる。

叙上の如く、万治寛文期の上方浄瑠璃界は、こうしたテキストを通じての江戸浄瑠璃導入によって大いなる増幅を果たしたのである。その営為に携わったのは、むろん太夫自身であり、正本もその責任において上梓をみているはずである。この点に間違いはない。しかし、その太夫周辺に、彼らを蔭に支えて、正本導入、そして時には作品の改訂編集の場に積極的に関わった人々があったに違いない。太夫名を明記しない正本ならぬ正本の存在、さらに語りの場を経由せぬ正本の上梓など、数々の例を確認する時、山本、鶴屋、西沢あるいは八文字屋といった書肆などもまた、その周縁者と同列にあったことが十分に想定されよう。のみならず、こうした出版書肆は、太夫の意向を先取りするかの如くに、自らの裁量や判断で、江戸浄瑠璃を積極的に移入し、適宜、添削改変を施

して、逆に太夫に本文を提供するといったこともあったのではないかと想像する。憶測は極力控えねばならないが、浄瑠璃正本の特定書肆による寡占的な出版慣行なども、このような本文導入事情と深く関わるのであろう。寛文二年の和泉太夫の上洛前後に典型的にみられた江戸系浄瑠璃の頻々な正本刊行状況などからは、このように本来は芝居の現場に先行するはずのない書肆の存在が大きくクロスアップされるのである。

以上のご指摘は、京都の正本が江戸の浄瑠璃を書承により導入することで成立しており、浄瑠璃の展開に書肆の存在が重要な位置を占めていることを示唆するものであり、寛永期にすでに生じている浄瑠璃と書肆との関係性と同質のものを、この万治・寛文期にもみてとることができる。ただし寛永期と異なるのはその書承でつながる元のテキストの所在が江戸であることである。この現象はこの期に江戸に浄瑠璃の作者が登場したことが大きな要因となっていよう。既述のようにこの期に江戸に登場した浄瑠璃作者は岡清兵衛が取り沙汰されることが多いが、他にも岡五郎兵衛（刊年不明、又右衛門刊『日本両武将始』）・小嶋佐平治（万治三年『箱根山合戦』）・四野宮彌四郎（刊年不明、金平本）などという作者が同時期に登場している。浄瑠璃界においては上方に先駆けて江戸にまず作者が登場するのであるが、これは同時期に仮名草子である江戸版が作成される第一の要因が、江戸において仮名草子を作成する作者が存在しないため、出版するテキストを調達するという意味で、京都に元版のあるテキストを利用していわゆる江戸版が作成されていたと考えられる状況とは対照的な事実である。万治寛文期の出版界においては、仮名草子においては京都から江戸へ、浄瑠璃においては江戸から京都へという逆のベクトルで、なおかつ別の書肆のグループでテキストが提供されていたということになる。そしてこの浄瑠璃における京都と江戸の関係は、いわゆる江戸版の事例と同様、以下に述べるようにある程度、双方の書肆が限定されたなかで存している傾向がある。

和泉太夫の正本は、そのすべてが日比谷横丁で営業する又右衛門・又左衛門・彦右衛門という書肆によって出版されている。又右衛門は承応頃から日比谷横町で営業を開始している書肆で、この金平物の浄瑠璃本で営業をスタートしたと考えられる。又左衛門・彦右衛門も同じく日比谷横町の書肆であり、特に又左衛門は名前の類似から又右衛門と同族の書肆と考えられる。この日比谷横町グループから出版された和泉太夫の正本を利用して作成されたと考えられる京都の正本のほとんどが、既述の阪口氏の報告で明らかのように、山本九兵衛から出版されており、その他鶴

屋喜右衛門版や西沢太兵衛版なども若干存するのである。つまり浄瑠璃の正本に関しては京都の山本を筆頭とする鶴屋等の浄瑠璃本屋のグループと、江戸の日比谷横丁の又右衛門を筆頭とするグループに繋がりがあると考えられるのである。

ところでこの期に他に江戸で浄瑠璃の正本を出版する書肆は、通油町に集中している。通油町はまた、この町に隣接する大伝馬三丁目とあわせて評判記や、いわゆる江戸版の仮名草子等、娯楽に供する本を出版する新興の書肆が万治期に集中して営業を開始した場所である。これに対して日比谷横町という異なる場所で営業する又右衛門・又左衛門・彦右衛門は、通油町界隈の書肆とは何か異なる属性を有している感がある<sup>(8)</sup>。そのひとつは、出版する正本の太夫の違いにあらわれている。既述のように又右衛門・又左衛門・彦右衛門の出版する浄瑠璃正本の太夫は岡清兵衛を作者に擁した和泉太夫に限られている。これに対し、通油町ではこの期にもすや・吉田屋・ますや・伊勢屋といった書肆が、以下のような浄瑠璃の正本を出版している。

- 身かはり問答 明暦四年初春 通油町もづや 天下一長門掾為英、江戸大薩摩若太夫
- 源氏の遊らい 万治二年三月 通油町吉田屋 江戸近江太夫
- 六孫王経元 万治二年三月 通油町吉田屋 江戸あふみ太夫
- 箱根山合戦 万治三年 通油町升屋 薩摩太夫直政
- 熱田大明神の御本地 寛文五年初夏吉旦 通油町ますや 筑後代次虎之介
- 山名神南合戦 寛文九年正月 油町舂屋 薩摩小太夫、あぶらや権太夫
- 仙人龍王威勢諍 寛文十一年三月 通油町伊勢屋 とらや永閑清五郎

上記のように、通油町の書肆から正本を出版する太夫は近江太夫・薩摩太夫直政・薩摩小太夫・長門掾・虎之介（後の土佐少掾）といった太夫たちであり、和泉太夫以外の正本は通油町グループの書肆で出版されているようである。なおかつ和泉太夫が、通油町グループの書肆で正本を出版することはない。太夫たちの出版は明確に棲み分けが行われているとあってよい。

こうしてみると、浄瑠璃の作者岡清兵衛とそれを語る和泉太夫のコンビが企画され、そのコンビが生み出す商品を出版することを前提として登場してきたのがこの日比谷横町に出現した又右衛門・又左衛門・彦右衛門という書肆のグループなのではなかろうか。又左衛門と彦右衛門の出版は浄瑠璃の正本のみが確認でき、又

右衛門はこの時期に評判記等浄瑠璃の正本以外にも出版を手がけているが、営業開始時点では和泉太夫と岡清兵衛コンビの正本の商品化を前提として商売を始めたのではないかと考えられるのである。

ということは、この万治・寛文期の出版界においては、仮名草子に関しては通油町界隈の江戸版を出版する書肆と京都の水田甚左衛門等の書肆とが繋がっており<sup>9)</sup>、浄瑠璃に関しては日比谷横町グループの書肆と山本九兵衛のグループが繋がっているということがいえるのであり、ジャンルによってそれぞれ異なるグループの書肆が繋がっている様子をうかがうことができる。

### 〈延宝・天和期〉

この期には宇治加賀掾の登場によって、それまでの京都の浄瑠璃界で金平浄瑠璃が大勢を占めていた状況に新風が吹き込まれ、次期の貞享年間に竹本義太夫の旗揚げをもって完全に古浄瑠璃から脱皮するまでの過渡期と位置づけることができる時期である。

加賀掾は紀州和歌山宇治の紙屋商に生まれたが、一芸で身を立てる決心をして謡、狂言、平家、舞・小歌等を修行し、それら、特に謡曲を取り入れての作品作りによって浄瑠璃の品位を高めることに務めた。出版との関連で言えば、加賀掾によって八行稽古本と段物集が出版されるようになるが、この八行本から節博士が施こされるようになり、これまでの読み物的な正本とは一線を画するようになる。注目すべきは、これら加賀掾の携わった出版が、ほぼ山本九兵衛から上梓されているということであり、出版に関しては加賀掾と山本九兵衛がコンビを組んでいた形跡がある。これまでみてきた山本九兵衛の動向から勘案すれば、こうした加賀掾の出版物の新たな工夫も、工房としての山本九兵衛との企画による新たな商品という位置付けができるのではないかと思う。

また加賀掾は伊勢とも関係を有している。加賀掾の京都での初めての興行は『今昔操年代記』によれば延宝三年京都四条河原においてであるが、上洛する以前は伊勢中の地蔵で操興行をしていたという。また上洛後の興行も伊勢嶋宮内の名代で行われているのである。伊勢嶋宮内の名代で興行する加賀掾が、当初伊勢で興行を行っていたことと、宮内が伊勢出身であることは偶然ではあるまい。兩人とも活動の土台が伊勢にあったことによる繋がりと考えるのが自然であろう。しかも伊勢嶋宮内の正本はすべて山本九兵衛により出版されていたが、加賀掾もまた山本九兵衛と密接な関係をもつ太夫である。加賀掾という延宝天和期に登場する太夫は、場所に

については伊勢と京都、書肆については京都の山本九兵衛、太夫については一時期前の伊勢嶋宮内との関係が濃厚である太夫といえる。つまり寛永期において浄瑠璃と出版界が関係を有するようになって以来存在している諸要素を、そのまま引き継いで活動を展開しているのが、延宝天和期の宇治加賀掾ということが言えるのである。次の貞享年間には竹本義太夫が登場し、浄瑠璃界はもはや古浄瑠璃とは一線を画す段階に入っていくことになる。

### 奥浄瑠璃

最後に出版界における伊勢と浄瑠璃の関連を考察する上で、奥浄瑠璃について触れておきたい。

奥浄瑠璃は、近世初頭から仙台や盛岡など東北で語られていた浄瑠璃である。『奥羽永慶軍記』に、天正年間には白河の座頭が「尼公物語」という浄瑠璃を語ったという記載があり、早くから東北の訛語で語られていたことが明らかとなっている。奥浄瑠璃はこの「尼公物語」も含めての東北の地方色の強い作品とともに、江戸の古浄瑠璃の影響をうけて成立しているものが多いことも知られている。そのことは奥浄瑠璃の本文の検討からも実証されているのであるが、『用捨箱』の次の記載も江戸の影響が奥浄瑠璃に及んでいることを示唆するものである。

江戸馬喰町の絵草紙屋西村屋与八に、阿弥陀の胸割、きりかね曾我、熊谷の類の古浄瑠璃六十種、元禄、宝永の頃再彫したる摺板伝はりてあり。近く文化中まで春毎に製本して奥州へのみくだせり。故に永寿堂にては仙台浄瑠璃ととなへ、また正本といふ。奥州には今も是等の浄瑠璃をかたる者あり。

製本して下している奥州というのは、おそらく仙台と限定して差し支えあるまい。いわゆる六段本が江戸の絵草子屋西村屋から、おそらくは仙台の書肆に卸されていたと解釈してよからう。元禄・宝永頃再刻した板で摺刷した古浄瑠璃だということであるから、特定の本屋から仙台にシステムティックに供給するようになったその上限は元禄頃になるかと思うが、阪口弘之氏によれば、奥浄瑠璃の中央からのテキストの摂取は「承応から享保にかけての頃が、奥浄瑠璃がレパートリー拡大に最も熱心であった時期とあってよいであろう」<sup>(10)</sup>とされており、古浄瑠璃が現役のものであった時期から、何らかの繋がりがあったことが考えられるのである。さらに阪口氏は「奥浄瑠璃は、在地系の語りものも含めて、上方や江戸など、中央との交流の

所産として成る。在地系の作も中央の洗練された語り口で粧われ、中央移入の作品にも土着の泥くさは匂う。それだけに、奥浄瑠璃にあっては、素材分類にも増して、在地と中央との関係解明が、個々の作品の成立経緯を明らめる上からも期待されるといえようか」と述べられているが、この在地と中央との関係については、前稿までの江戸版の考察において述べたように、江戸の出版界が仙台と何らかの繋がりをもっていた形跡があることと符合するのである。例えば元禄七年に、江戸の松会が仙台の書肆山村市右衛門と『十四経眸子』を相合で出版しているが、これは中央と地方の書肆との相合版としてはかなり早い例である。この仙台の山村市右衛門という書肆と松会にどのような繋がりがあのかは不明で、不思議な出版の例である。しかし、ここに伊勢というキーワードを持ち出して考えてみれば、伊勢商人は江戸を中継地点にして北関東や東北に流通のルートを持っており、仙台に営業の拠点を置いていたことが思い起こされる。伊勢商人が出版に携わっていたとすれば、江戸の松会と仙台の書肆との繋がりも、浄瑠璃の正本が江戸から仙台へもたらされていたことも伊勢商人のネットワークがもたらしたものとすれば説明がつく。ちなみに仙台でもっとも旺盛な出版活動をした書肆が伊勢屋半右衛門という、伊勢出身であることを思わせる屋号であることも注目される。奥浄瑠璃については、初期出版界における伊勢・江戸・京都という三つの場所の関連と、草紙類出版の動向を背景として検討してみる必要があるのではないかと考える。

以上古浄瑠璃といわれる時代の浄瑠璃の展開を概観してみると、まずその画期が、江戸版を出版する中心的書肆である松会の営業の画期とほぼ一致することがまず判明した。書肆松会の動向の画期はすなわち、松会以外の江戸版を出版する書肆の画期でもある。このことは、とりもなおさず京都と江戸の出版界に登場した新興のジャンルを出版する書肆全体の動向が連動していることを意味する。以下に江戸版出版（仮名草子）の動向と浄瑠璃本出版の動向を整理してみる。

浄瑠璃は、寛永期にはすでに浄瑠璃本屋といわれる浄瑠璃を専門に出版する書肆が京都に登場し、出版が開始されるが、江戸ではいまだ浄瑠璃をはじめとする娯楽的な書物の出版は行われていない。この浄瑠璃本屋は浄瑠璃専門の書肆であることから、本来語り物という口承的なものである浄瑠璃を書承化、本文化する体制があらかじめ整っているなかで登場してきた書肆と考えられる。浄瑠璃の興行界と何らかの繋がりがあったと考えられるのである。そしておそらくその浄瑠璃本屋は、さまざまなテキストが集積していた、一種の工房のような場であり、そこから浄瑠璃

と同素材の別のジャンルの本が作成されていくような機能も有していた。その代表的な書肆の一つが山本九兵衛であったと考えられる。九兵衛はこの時期、伊勢出身ではあるが、江戸経由で京都にやってきた太夫伊勢嶋宮内の正本を一手に刊行していた形跡がある。その正本には「江戸伊勢嶋宮内」と明記されており、宮内は伊勢ではなく、明らかに江戸からやってきたことが意識されているといえる。つまり山本九兵衛は、いわば江戸のコンテンツである宮内を商品化しているという点で、この時点での江戸とのある種の繋がりを指摘できるのである。

万治・寛文期になると江戸でも娯楽的な書物が出版されるようになり、浄瑠璃や評判記等に次いで、いわゆる江戸版が登場してくる。そしてこの時期から江戸と京都の出版界は新たな繋がりを持つようになり、仮名草子では京都から江戸へ、浄瑠璃では江戸から京都へテキストが供給されている。浄瑠璃と仮名草子は、それぞれ特定の書肆が出版している傾向がある。浄瑠璃の出版では京都の山本九兵衛が、江戸版の出版では松会がその中心的役割を果たしていたようである。また江戸版の出版については、それが独特の造本様式であることから、この期に江戸にも工房のようなものが登場したと考えられ、江戸版を作成する書肆のグループは、同じ制作の場で本を作成していたと考えられる。ということは、この万治・寛文期には、京都にも江戸にも工房のようなものが存し、そこに関与する書肆がグループ単位で繋がりをもっていたということのようなのである。

延宝・天和期は、浄瑠璃界においても江戸版の出版についても過渡的な時期で、浄瑠璃は宇治加賀掾が京都に登場して、京都の多くの正本が江戸の金平本のテキストに頼って作成されていた段階から、謡曲などを取り入れた新たな作風に加賀掾独自の正本が作成されるようになる。一方、江戸版はその点数が激減し、代わりに以前のように京都の往来物や実用書等の覆刻や求板が増加する。この期になって、何らかの理由で京都からの仮名草子のテキストの調達が中止され、従って江戸版の作成が行われなくなるということであろう。これは見方によっては同時期の上方における浄瑠璃の出版が江戸のテキストに頼らなくなったことと表裏一体の事象である可能性も考えられる。

貞享年間には、浄瑠璃界は竹本義太夫の登場によって古浄瑠璃の時代から脱皮していくことになり、江戸では江戸版の出版は行われなくなり、その代わり京都との相合版が増加して行くことになる。

浄瑠璃を出版する書肆については、浄瑠璃という、興行を伴う芸能の正本を専門に扱う書肆として登場してくることや、興行と密接に関連していると考えがちな正

本の内容が、実は書肆の関与によって正本が太夫から離れ、一人歩きしている可能性も存することを考慮すれば、そのような恣意的なことができるという点において、本来興行と出版のどちらにも携わっているような、いわばプロダクションのような機能を有した京都と江戸の書肆が繋がりをもちながら営業を展開していた可能性も指摘できよう。秋本鈴史氏は、「なぜ成立したばかりの本屋が、そこまで浄瑠璃本の出版や販売に熱心であったのか。芸能としての操浄瑠璃の人気だけでは説明がつかないように思える。四条河原などで興行を行う操り浄瑠璃と、本屋とがいかなる関係をもっていたのかを考える必要があると考えられる。」（「寛永期の浄瑠璃」）とされているが、上記のように考えれば、浄瑠璃興行界と書肆とは別枠のものではない可能性も考えられるのである。

そして当時の書肆がそういったプロダクシヨンの機能を持ち得ているのは、その経営自体に伊勢商人が関与していたことで、商売のノウハウや流通ルートも存在していたからであると考えれば、当時、実際に生じている様々な事象、江戸の書肆松会と仙台書肆との相合版出版、奥浄瑠璃と江戸の絵草子屋との関係、仙台の大手書肆伊勢屋半右衛門の存在等、その他多くの出版界における伊勢関連の事象（前稿までの拙稿を参照のこと）が納得のいくものになるのである。筆者は江戸版について考察してきたなかで、万治年間あたりから江戸で次々と営業を始めた娯楽に供するような本を出版する新興の書肆が、主に木綿業に携わる伊勢商人が軒を連ねていた大伝馬町とその通りに続く通油町に集中しているのは偶然ではなく、同じ伊勢からやってきた商人、あるいは印刷職人のなかに、出版を手がけるものが現れた結果なのではないかと考えている。その中心的書肆である松会が伊勢出身である可能性が高いことも、その蓋然性を高めている<sup>(11)</sup>。この通油町界隈の草子類を出版する新興の書肆群のなかにも、その出版の動向から鱗形屋のように、松会のグループとは異なるカテゴリーの書肆も存すると考えられるのであるが<sup>(12)</sup>、日比谷横丁の書肆一群も、何か営業方針を同じくする一グループということなのであろう。こうした書肆のなかには、出版点数がさほど多くない書肆も散見されるのであるが、これらの書肆は、書肆を専門として商売をしていたのではなく、何らかの商売のかたわら、プロダクシヨンの機能をもつ書肆と繋がっていた工房を利用して本を出版していたのではないだろうか。その工房と繋がっていたのが松会と考えれば、江戸版作成の中心的役割を担っていたのが松会であることも納得される。ちなみに京都で同様の役割を果たしていたのが、山本九兵衛なのであろう。本稿における古浄瑠璃の考察のなかでも、伊勢との関わりは各時期に看取することができた。江戸版の



考察においてもしかりであった。以上のことはいわば状況証拠でしかないといえ、それまでであるが、資料の存在しない時期の考察の方法としては、このような手法もあながち無駄ではあるまい。初期出版界の様相は、京都と江戸と伊勢を繋いで考えてみるのが、やはり有効であると考え。

## 注

1. 柏崎順子編『増補松会版書目』（『日本書誌学大系』96，青裳堂書店，平成21年）
2. 母利司朗「近世前期江戸版の本文版下」（京都府立大学学術報告『人文』64，2012年）
3. 阪口弘之「操浄瑠璃の語り——口承と書承——」（『伝承文学研究』42巻，1994年）
4. 秋本鈴史「寛永期の浄瑠璃」（岩波講座 歌舞伎・文楽第7巻『浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』所収，1998年）
5. 浜田啓介「草紙屋仮説」（『季刊江戸文学』8，1992年，ペリかん社）
6. 阪口弘之「街道の浄瑠璃——左内と宮内——」（大阪市立大学文学部紀要『人文研究』29-1，1977年）
7. 阪口弘之「金平浄瑠璃と東西交流」（岩波講座 歌舞伎・文楽第7巻『浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』所収，1998年）
8. 又右衛門の現存最古の出版物は承応四年『にしき戸合戦』であり，万治三年『頼義北國落』とともに住所は御成町になっている。ついで幸町，日比谷横町と住所が変遷するが，この住所の変遷について母利司朗氏は，御成町という町名は不詳であり，もし御成橋周辺をさしたとすれば，幸町また日比谷横町も，すべて同じところの異称であった可能性もあるとされている（『東海近世』第十二号，東海近世文学会，平成十三年）。いずれにせよ，又右衛門・又左衛門・彦右衛門が，たとえ一時期だけあっても日比谷横町で営業していたということが重要である。
9. 柏崎順子「江戸版考 其三」（一橋大学研究紀要『人文・自然研究』第四号，一橋大学大学教育研究開発センター，2010年）
10. 阪口弘之「奥浄瑠璃」（岩波講座 歌舞伎・文楽第7巻『浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』所収，1998年）
11. 柏崎順子「江戸初期出版界と伊勢」（一橋大学研究紀要『人文自然』第六号，一橋大学大学教育研究開発センター，2012年）
12. 柏崎順子「鱗形屋」（『言語文化』第47巻，一橋大学語学研究室，2010年）